

SOUND TO THE FUTURE

“シンフォニー”は第2楽章へ— ホールの歴史と未来を語るスペシャル座談会

30余年の時を経て、新たな船出を迎えようとしている「ザ・シンフォニーホール」。

継続を決定した滋慶学園グループの総長でありながら、東京フィルハーモニー交響楽団の理事も務めるなど「文化人」としての一面も持つ浮舟邦彦氏と、朝日放送アナウンサーとして、数々のクラシックシーンに立ち会っている“クラシック通”堀江政生氏を中心に、同ホールの経営・運営に携わる田仲豊徳氏、プロの音楽家、そしてホールの音楽総監督を務める喜多弘悦氏を交え、ザ・シンフォニーホールとホールを取り巻く環境、そして今後について、それぞれの視点で語る。

原点は、ファンとして抱いた憧れ。

浮舟(以下U) 堀江さんは朝日放送では「クラシック通」として知られていて、この間、ザ・シンフォニーホールのコンサートでも司会をされていたよね。

堀江(以下H) ええ。開館30周年の時に。

U 私も1980年代からよく、このホールのジルベスター・コンサートに行っていました。(当時、ホール北側にあったホテルプラザに泊まって、コンサートを聴くのが定番でしたね。

H 僕も実は2000年前後に3回ほどジルベスター・コンサートの司会をさせていただいたんですよ。

U じゃあ、もしかしたら、その頃にお会いしているかもしれませんね。実は、若い時からクラシックの世界と縁があったんですよ。大学では音楽研究会みたいなことをやって、LPもずいぶん持って楽しんでいましたね。その後、新星日本交響楽団(2001年に東京フィルハーモニー交響楽団と合併の理事をお引き受けしてからは、もう20年になるし、今回はご縁があってザ・シンフォニーホールが培ってこられた文化や伝統を継続する役割を担おうと決めたんです。

「想い」を継承し、「出会い」を創造する。

H このホールを引き継ごうと思われたのはなぜですか？

U やはり、大阪人としてこのホールはなくてはならないものだという思いがありました。来年2月にニューヨーク・フィルハーモニックが公演しますが、「残響2秒」という素晴らしい環境を継続させて、大阪で演奏するならば、シンフォニーホールと逆指名していただけるようなホールを残していきたいと思ったんです。

H 若い頃からホールのオーナーになるといいうイメージはお持ちでしたか？

U 全くないですよ、ただこのお話を聞いたときに、ホールを継続することで社会のお役に立てると思うとお引き受けしました。学校(滋慶学園)も同じです。「大きくするぞ」という思いだけではなく、「こうありたい」という理念に沿って忠実に事業を進めて来ているのです。

田仲(以下T) 私も運営していく立場として、ままでのファンの方々が持たれているホールに対する想いを継承していくことが仕事のひとつだと思っています。また、新たなクラシックファンの拡大も図っていききたいですね。実は私自身これまでクラシックとはまったくの無縁だったんです。

H そうなんですか？

T そうなんです。ホールを引き継ぐと決まった時に初めて聴いて、生音の素晴らしさを直に感じました。60数年間、ホールに行ったこともなければ、クラシックをじっくり聴いたこともなかった私が、聴いてみたら「ええやんか!」となったように、同じ思いを抱かれる方もまだまだたくさんいらっしゃると思うんですよ。

H そうですね。クラシック音楽の素晴らしさにまだ出会えていない人たちは多いかもしれないですが、

T そういう方たちにクラシック音楽との出会いの場を提供することで、ファンになつていただければと思うんです。新たなクラシックファンを増やすことも、ザ・シンフォニーホールにとって重要な役割のひとつですから。

舞台裏が物語るホールの歴史。

H そういったホールの継続、ファンの拡大のために新たなアイデアや取り組みは考えてらっしゃいますか？

U いまはさまざまなアイデアを出しあい、具現化しているところです。まずはファンの方にホールが積み上げてきた30年の歴史を感じていただくことが必要だと思います。そのひとつとして、演奏者がバックヤードに貼っていたステッカーを見ていただく機会を作ろうと考えています。あれは素晴らしい歴史を感じますし、お客様にも楽しんでいただけたらと思うんです。

H 良いですね！ 重みを感じることが出来ますからね。

喜多(以下K) 演奏者にとってあのステッカーは、「この人たちと同じ舞台上に立つんだ」という気持ちになれるものなんです。でもこれからは、お客様にもホールの歴史を共有していただきたいと思うんです。ステッカーや楽屋に置かれている(ヘルベルト・フォン・カラヤンが座った椅子などを見ていただいて、ファンの方に「カラヤンをはじめ、多くの著名なアーティストがこのホールで演奏したんだ」と、思い返していただくのは大切なことですよ。

H 僕も中に入って、多くのアーティストと話をしていると、「こんなに面白い人たちが演奏しているんだ」と感じますし、それを、なるべく大勢の人に知ってもらえたら楽しいだろうなと思います。

コンサート之余韻も醍醐味のひとつに。

U ホール内で言うと、ホワイエのリニューアルを考えています。窓から見える公園の緑は素晴らしいじゃないですか！ そこで公演後に、おいしいシャンパンやワインで一息つきながら、お客様に余韻を楽しんでもらいたいんです。

H いいですね！ 演奏した人にも入っていただいたらそこで交流が生まれますし、何だかワクワクします。

U 我々もワクワクしながら考えていますよ(笑)



Kunihiko UKIFUNE



Masao HORIE



Toyonori TANAKA



Hiroyoshi KITA

右ページ写真右より／© Yoshio Masuda

浮舟 邦彦

ザ・シンフォニーホール 総監

滋慶学園グループの創設者で滋慶学園グループ総長。1976年社団法人新設会の創立に参画。82年、大阪医療技術学園理事長に就任。83年に滋慶学園理事長に就任以降全国に職業教育を通じて社会に貢献するというミッションを共にする滋慶学園グループ全56校を展開する。その教育に対する理念と活動が評価され、95年にはWFW(ワット・フット・ワット)大学より国際教育学名誉博士号、2000年にはロビニア・カレッジ・シカゴより人文科学教育名誉博士号、13年には韓国啓明大学より教育学名誉博士号を授与される。又、2000年には日野原重明路加国際病院理事長が会長を務められる一般社団法人医療秘書教育全国協議会理事長、01年財団法人日本ライイトハウス理事、財団法人日本医療保険事務協会理事にそれぞれ就任し社会貢献活動を継続している。社会文化活動として旧新星日本交響楽団の理事を務め合併後引き続き東京フィルハーモニー交響楽団の理事を務めるクラシック音楽界に尽力している。

堀江 政生

朝日放送アナウンサー

明治学院大学卒業後に朝日放送入社。報道番組のキャスターを歴任。朝日新聞社に出向。麻生太郎、鳩山由紀夫両元首相の香典を務める。復帰後はアナウンサーとして活躍している。ABC主催のクラシック・ファン・コンサートに司会を務めるなどクラシック音楽にも精通。チェリスト堀江牧生の次男でもあり、自身がパーソナリティを務めるABCラジオ番組でも度々クラシック音楽のコーナーを設け、クラシック音楽普及に尽力している。2013年4月からABCラジオ新番組「堀江政生のサンフォニーホールアワー」のメインパーソナリティを務めている。

田仲 豊徳

株式会社ザ・シンフォニーホール 代表取締役社長

株式会社 滋慶 代表取締役社長
株式会社 フレイン・タック・ファンタジー 代表取締役社長
株式会社 F.M. 代表取締役社長
株式会社 滋慶出版 代表取締役社長
1976年に購買して財務を通して滋慶学園グループを支えてきた財務・金財のプロフェッショナル。滋慶学園グループの企業部門、財務会計部門のトップとして活躍している。

喜多 弘悦

株式会社ザ・シンフォニーホール 音楽総監督

ジュリアード音楽院大学 大学院卒業
大阪エッセイ・ミュージック専門学校
滋慶学園COM(グループ)音楽系副校長
COM(グループ)音楽系副校長
株式会社 滋慶・カレッジ・セラルマー・ジャー
1992年ジュリアード音楽院を卒業後帰国。ソノオックス・トラ・アサンブルのプレイヤーとして活動する傍ら音楽大学の教育にも携わる。98年に大阪スクールオブミュージック専門学校教育顧問に就任。2000年、副校長に就任し、COM(グループ)を創設し、音楽監督に就任。現在に至るまで音楽教育教材開発、教育人材育成、学校運営を行う。

新たな価値を奏で続けていく。

K あくまでもいままで脈々とやってこられた通常のクラシックコンサートと、それを好きで集まってきたる会員の方を大切にしていこうというビジョンは変わりません。そのうえで、お子様をはじめ、20代や30代の若い方にも遊びに来ていただけるホールにするための新しい仕掛けも考えているんです。

U そのひとつとして、さまざまな時間帯でホールを使えるようにしたいと思っています。夏休みなら、朝8時から子ども向けのコンサートがあってもいいじゃないですか。クリスマスに見た、ニューヨークのレディオシティ・ミュージック・ホールのミュージカルなんて、朝8時から何公演もやっているんですよ。

K 1日で8公演くらいありましたかね。

U それを考えると、ザ・シンフォニーホールにも、「いろいろな時間帯の公演があってもいいだろう」となりますよね。また、「どんな公演を行おうか」という発想から、「ホールをどう使っていくか」という発想に切り替えれば、深夜から翌朝までは「録音スタジオに使いませんか」「レッスンにどうですか」という新しい考え方も出てくるわけです。あらゆる角度からホールを見つめ直すことが大切だと思います。

H 確かに、いま演奏家を目指している若い人たちは、「どうやってこういうホールを使うことができるだろうか」と頭を悩ませているんです。それが、ザ・シンフォニーホールを使ってレッスンが出来るようになったらとても素晴らしいことですし、幸せなことですね。

U ホールはクローズしていたら何も生みませんが、開場している限り、価値を生み出していくと思っ

音楽と映像のコンチェルト。

U さらに、映像と光を音楽と融合させて、コンサートも考えています。

練習していても絶対に身につかない能力なんです。だから、そういう機会を子どもたちに作っていくのは、この上ない情操教育だと思います。

H なるほど。僕はそこまで想像できなかったんですけど、野球でも何でも試合があると、みんなが見ているから張り切るし、正しい練習が報われますよね。そういう意味で大きなホールで演奏出来れば報われるかなと思ったけれど、考えてみたらどうですね。「返ってくる音を聴き分ける」というすごく勉強になる瞬間なんです。

U お客様に向けては、解説を聞きながら音楽を聴くコンサートもあつたらいいですね。解説入りの歌舞伎を観ると同じように。

K 堀江さんがラジオ（ABCラジオ）堀江政生の「ザ・シンフォニーホール・アワー」でやられているような音楽にナレーションを付けるコンサートがあれば、より分かりやすいですね。

H そうですね。両方ですよ。伝統的なコンサートも守っていかなければいけませんから。ただ、僕はクラシックばかり聴いてきたので、オーケストラが入ってきて指揮者が出てきて、演奏して、拍手をもらって帰るという状況が当たり前になっているのですが、「なぜ、司会者がいないの?」と思われている方もずいぶんいらっしゃるんですよ。最近は指揮者が解説をするコンサートも増えてはいますが、せっかく僕もアナウンサーの仕事もさせてもらっているんで、もっとそういうものをやりたいなという気持ちはありますよね。

T 堀江さんみたいな方が曲の説明をしてくださったら、「あ、そうなんだ」と僕ら初心者も納得出来ますよ。

U ザ・シンフォニーホールが学校になりそうですね。素晴らしい学校ですよ！

ホール全体でアーティストを応援。

U ところで、喜多さんは演奏家としてさまざまな

“クラシック音楽のすばらしさを
ひとりでも多くの人へ届けたい。
そのためにホールができることを考える。”

ホールで演奏していますが、ホールによって演奏しやすい、にくいはいありますか？

K あります。まず大きいのが、裏から入ってきて舞台に出るまでの空気感ですね。それはスタッフのサポート意識などもあると思います。スタッフがものすごく温かく迎えてくださったのは、NYのカーネギー・ホールでした。あそこで働いている人たちは若者を大事にしてくれて、楽屋口に入るときからガードマンがそんなにスツと入っていないの。話しかけてくるんですよ。「今日君は、プロの第歩をここで越えるんだよ」。そこで「あ、そうや」と意識が変わって、演奏も変わる。ホールのスタッフも演奏者に影響を与えるんだと感じることは多いです。

U ホールはハード面だけではなく、そこにいるスタッフのソフトな部分、会場が持っている雰囲気などが総合的に、演奏者に影響を与えているということなんですね。それはもちろん客席にも伝わる。カーネギー・ホールのように、ザ・シンフォニーホールでも、学生にそういう機会を与える役割は必要だと思うんですよ。

H そうですね。実は、長男はチェロを勉強しているのですが、ザ・シンフォニーホールでは9歳で初めて演奏させてもらいました。当時の大阪シンフォニー（現大阪交響楽団）と共演させていただき、ソロで演奏したのですが、舞台裏で胸を触ったら、手が震えるくらいに、心臓の鼓動が激しかったんですね。でも、舞台上上がって拍手をもらった時には、冷静になっていたんです。お客さんが「頑張れよ」という拍手をしてくださっていたからで、演奏を終えての第二声は「温かった」でした。いまだに「大阪のお客さんは本当に応援してくれる。『所懸命聴いてくれて、自分と同じ想いになっているのが弾いていて良く分かる』と、言っています。大阪の人たちは頑張っている若い人たちを応援しようという気持ちもありますし、そういう人たちがザ・シンフォニーホールに集まっているのを感じま



多くのアーティストが登壇することを憧れているザ・シンフォニーホールのステージ



「堀江政生のザ・シンフォニーホール・アワー」収録の様子。「クラシック音楽の魅力が伝わる番組を目指す」と堀江氏



ザ・シンフォニーホール建設当時の姿。30年前は並木道の木々も若々しく、ホール全体が見渡せていた



著名な演奏家やトップ・オーケストラが演奏した証である、バックヤードのステッカーの数々



2階ホワイエから見える公園の緑もホールの美しさを引き立てている



ザ・シンフォニーホール開館30周年記念ガラ・コンサートより(2012年10月14日)

K 例えばR・シュトラウスが作曲した「アルペン・シンフォニー」は、夜明けから夕暮れまでのアルプスの二日を表している曲なんですが、音楽と「一緒にその情景を映像で流したら、初めて聴く人たちが曲に入り込むことができると思うんです。

U そこに3Dが入ったとさらに面白いですよ。雨がパッと降ってくるとか。いま、眼鏡をかけなくていい3Dもありますよね。

K プロジェクション・マッピングですね。あの装置を導入することで、例えば「銀河鉄道999」だったら、天井を汽車が走る演出が出来るんです。そういう演出なら、お子さんたちも良い思い出になると思います。

H しかも生演奏ですよんね！

K プロジェクション・マッピングはいまサンフランシスコ・シンフォニーとシドニーのオペラハウスが取り入れ始めていて、人気のコンサートになっているんです。

U 日本ではぜひ、ここでやりましょう！

子供たちの耳と心と夢を育てる。

K 堀江さんはクラシックファンとして、ホールでこんなことがあったらいいなというのはありますかね？

H そうですね、子どもたちが出演する演奏会ですね。成長過程の音楽をみんなで聞ける場面が欲しいです。小さいころから音楽を頑張っている子どもたちは大勢いて、彼らが演奏する姿は見ていて心が和みます。本人にとってみれば、こんな大きなホールで大勢の人の前で演奏して拍手をもらえれば、練習でつらかった思いもスツと晴れて、また明日から頑張ろうという気持ちにもなる。それに、親たちも必死になるでしょ？（笑）

K それは重要なポイントだと思います。音楽家にとつていちばん大事なのは耳じゃないですか。楽器から出てくる音だけでなく、響いている音、倍音を聴き分ける耳が必要なんです。でもこれは、小さい部屋で

すね。

T そうなんです。だからこれからも、ザ・シンフォニーホールはファンの方を大切にしていかなければいけないんです。

福島という素晴らしい街とともに。

U また、地域に愛されるホールでもありたいですね。福島というエリアは、素晴らしいレストランやおしゃれなバーがたくさんありますから。連動していければと思います。

T 梅田から「駅、あるいは歩いてこられる」という立地条件は素晴らしいですね。昔、道頓堀に五座という五つの劇場があつて、それを中心に飲食街が発展したように、劇を観るとか音楽を聴くという事と、食べるという事は体だと思っ

た。

H いい演奏会であればあるほど、終演後に真っ直ぐ家に帰るのは少し物足りない気持ちがありますもんね。

U だから、ザ・シンフォニーホールはこれからも地域のひとと密着して愛されるホールでありたいと考えています。

T そして将来的には、我々がロンドンやニューヨークにミュージカルを観に行くように、世界各国からクラシック音楽を大阪のザ・シンフォニーホールで聴こうよというくらいにしたいですね。そういう大きな夢と想いを持って、この事業を続けていこうと思

います。

H そのために、私もザ・シンフォニーホール・アワーをはじめラジオを使って、「一緒にコラボレーションして盛り上げていけたらと思います。

K せっかくのラジオ番組ですから、上手にかかわり、相乗効果を上げていけるようにしたいですね。

U そこは大事なポイントです。メディア・ミックスというのかな。ぜひ、よろしく願います。